

平成21年 6月15日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19730332
 研究課題名（和文） 階層・ライフスタイルの多極的構造と政治—若者にみる社会的ミリューの実証研究
 研究課題名（英文） Social Stratification, Lifestyle and Politics: Young People and Social Milieus in Japan
 研究代表者
 松谷 満 (MATSUTANI MITSURU)
 桐蔭横浜大学・スポーツ健康政策学部・講師
 研究者番号：30398028

研究成果の概要:本研究では、2007年に東京都で若年層を主対象とする質問紙調査を実施した。このデータを用いて、(1)ライフスタイルなどの主観的諸条件によって若者を類型化し、(2)階層要因を重視する社会学モデルではとらえきれなかった若者の政治的亀裂を明らかにした。具体的には、脱産業化期に顕在化したポピュリズムおよび左派ニューポリティクスの支持基盤が、階層集団よりも文化集団(=ミリュー)によって、よりよく説明しようという可能性を示すことができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,900,000	0	2,900,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	150,000	3,550,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：政治社会学、ライフスタイル、社会意識、若者文化、脱政党化
 ポピュリズム、ニューポリティクス、社会変動

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代若者論をめぐって

本研究開始にあたっては、昨今の「若者論ブーム」がその背景としてあった。近年、若者論は広く注目を集めているが、ステレオタイプな印象論が氾濫しており、現実に即した議論がなされているとは言い難い。

アカデミズム、とりわけ社会学においてはそうした若者論を批判する議論が多くみられる。しかし、多様化したとされる現代の若

者をどのようにとらえるか、という課題に対して有効なアプローチがまだ確立されていないのが現状である。

社会学では、職業・学歴を重視する階層モデルが現在でも中心的な位置を占めているわけだが、その限界は1970年代以降たびたび指摘されてきた。はたして階層モデルのみで多様な若者の全体像をとらえることが可能なのか。

本研究ではこうした問題意識から、ドイツ

で隆盛をみたミリユー・アプローチの適用を試みたのである。

(2) 若者と政治をめぐる

近年、「若者論ブーム」と並行して、「若者と政治」にも注目が集まっている。「劇場型選挙」に象徴されるようなポピュリズム、新しい形でのナショナリズム、それらとは対極的な市民運動など、多様な現象がみられるが、実証的な調査研究は乏しく、かつ階層モデルにかわるアプローチも試みられていない。

また、政治意識・投票行動研究においては社会学的アプローチよりも支持政党や業績評価などを説明要因とする政治心理学的アプローチが主流であり、「政治」の外的要因を取り込んだ新たなアプローチの必要性を感じていた。折しも、ポスト 55 年体制期の政治状況は上記のような「脱政党」的な現象が噴出しており、こうした時代状況にあつてはミリユー・アプローチの導入に大きな意義が見出せるのではないかと考えたのである。

2. 研究の目的

本研究の主目的は以下の 2 点にあった。

(1) 階層などの客観的諸条件とは相対的に独立したミリユー (=ライフスタイルを中心とする主観的諸条件によって形成される潜在的な文化集団) によって現代日本における若年層の分化を適切にとらえうるモデルを構築すること。

(2) ミリユー・モデルを政治行動分析に適用し、若年層の政治的亀裂について明解な説明図式を提示すること。具体的には、①ナショナリズム、新自由主義的価値、ニューポリティクスの価値などの価値意識の分岐、②ポピュリズムや市民運動の支持基盤の解明などを具体的な課題として設定した。

3. 研究の方法

(1) 予備分析と調査設計

研究代表者らは以前の科研費プロジェクトにおいて、全世代を対象としたミリユー調査を東京で実施していた。しかし、この調査では若年層におけるライフスタイルの多様性をうまく反映した類型化がなしえないという問題があった。

したがって本研究ではまず、この調査のデータおよび既存の若者研究をもとに、より若者の実態に即したミリユーを析出すべく、調査内容の検討を入念に行った。

(2) 東京調査の実施

調査準備の後、東京都において「都民の社会意識と政治に関する調査」という質問紙調査を実施した。東京都知事選直後の 2007 年 5～6 月に都内 8 区市の有権者 4800 人を対象として実施し、有効回収数は 1663 票だった。若年層 (20～39 歳) サンプルはそのうち 588 票であった。対象を若年層に限定しなかつた

のは、他世代との比較も念頭に置いたためである。実査に際しては、他の科研費プロジェクトの共同研究者からさまざまな形で協力を得た。

(3) インタビュー調査の実施など

「若者と政治」の研究に取り組むのに際して、脱政党時代の政治状況を把握し、量的データ分析を補完すべく、政党関係者、市民運動関係者に幅広くインタビュー調査を行った。その調査内容は、テーマ設定、分析結果の解釈等において大いに役に立った。

4. 研究成果

(1) 研究成果：若者ミリユーの析出

東京調査データを用いて、若者ミリユーの析出を試みた。操作概念としてのミリユーを「ライフスタイル・メンタリティの共通性」と定義し、31 の質問項目から抽出された 11 の因子によってクラスター分析を行った。分析から析出されたクラスターを本研究ではミリユーとみなしている。

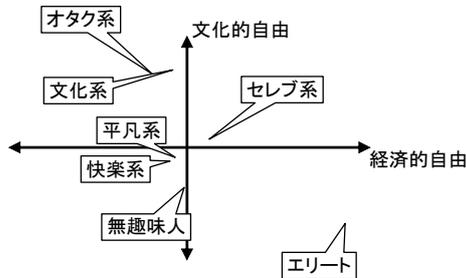
最終的に析出されたミリユーは以下の 7 つである。

- ・ オタク系：きわだつて非社会的。非正規雇用が多い。地位や消費への関心はもつとも低い。一方でマンガ、アニメ、ゲームへの関心が高い。
- ・ セレブ系：消費への関心が高く、自分らしさを重視する。もつとも社会的。一方で、文化全般に対する関心は低い。
- ・ エリート：高学歴男性が多く、社会的な一方で、テレビをほとんど観ず、スポーツに対する関心も低い。非快楽的で地位や収入を重視する。
- ・ 無趣味人：非社会的で消費への関心も低い。自分らしさをもつとも重視していない。もつとも活動性が低いミリユー。
- ・ 平凡系：主婦が多い。快楽志向がもつとも低く、なおかつ消費への関心も相対的に低いというように堅実な生き方をしている。
- ・ 快楽系：地位や収入は重要だが、できれば遊んで暮らしたいという意識が強い。テレビもよく観るし、スポーツもオタク系文化も好き、ネットもよく利用する。
- ・ 文化系：女性比率が高いが、大卒比率も「エリート」に次いで高い。自分らしさを重視し、消費への関心も高い。読書・芸術方面への関心が際立って高い。

析出されたミリユーは多様な若者像をうまく反映しており、政治領域以外の若者研究にも応用可能性がある。また、社会的属性の影響が強くあらわれているものの、1 対 1 の対応関係にはなく、社会的属性ではとらえきれない分化の諸相を適切に示しえたものといえよう。

(2) 研究成果：若者ミリュウと価値意識

析出されたミリュウについて価値意識との関連を分析した。価値意識については、これまで共同調査研究を積み重ねてきており、文化軸（自由主義—保守主義）、経済軸（自由主義—平等主義）の二軸が政治分析において主要な軸となることを確認している。本研究においてもこの二軸とミリュウとの関連をみた（下図）。



図の布置は、若者における価値意識が社会的属性よりむしろ、ライフスタイル・メンタリティの共通性によってよりよく説明されることを示すものである。たとえば、「エリート」および「文化系」はともに高学歴層を中心とするミリュウだが、価値意識においては対極に位置する。「オタク系」および「無趣味人」の階層的地位は相対的に低いが、両者は文化軸においてはかけ離れた位置にある。

本研究の課題に即して整理するならば、以下のようなになる。価値意識における経済軸は実際の社会的地位だけでなく、地位志向の程度によって影響を受けるものである。一方、ナショナリズムやニューポリティクスの価値にかかわる文化軸については、個々人の文化的選好のパターンがその分岐に強く影響することが明らかになった。

(3) 研究成果：若者ミリュウの政治的選好

政治的選好に関して、とくに注目したのはポピュリズムの支持基盤についてである。具体的には、石原慎太郎東京都知事や小泉純一郎元首相に体现されるようなポピュリズムを誰が支持しているのか、といった問題をミリュウ・アプローチによって分析した。その結果、以下の知見が得られた。

- ① 自民党を支持しないが小泉・石原は支持するといった親ポピュリズム層の存在は確認できるが、社会的属性による偏りはみられない。
- ② ミリュウ・モデルからみると、親—反ポピュリズムの明確な分岐は、地位や収入といった「物質的」目標を重視する「エリート」「セレブ系」とそうした目標を重視しない「オタク系」「平凡系」とのあいだにある。
- ③ ただし、その分岐は単一の変数に還元で

きるほど単純なものではなく、「エリート」以上に「セレブ系」が小泉・石原の熱心な支持層である、価値意識において「オタク系」と近似する「文化系」は小泉・石原への反感が少ない、といった複雑な関連がみられる。

このように、親ポピュリズム層の中核が「セレブ系」ミリュウにあることが明らかにされたわけだが、その後の分析によって修正的な知見が新たに得られた。ポピュリズムに対する支持—不支持のみではなく、市民運動や東アジア諸国など他の対象に対する支持—不支持の傾向をあわせて検討したところ、「セレブ系」「文化系」はポピュリズムのみならず他の対象に対してもおおむね好意的な傾向がみられた。すなわち、現代日本のポピュリズムは排外的傾向の弱い人々が中心的に支えており、西欧の極右とは別の文脈でとらえる必要があることがわかったといえる。

逆に、「無趣味人」はポピュリズムに対して懐疑的であるが、それ以上に東アジア諸国に強い反感をもっており、その意味では潜在的な極右の支持基盤ともみなしうる。何らかの要因が介在することで、こうした層が政治的に活性化する可能性もあろう。また、しばしばバッシングの対象となる「オタク系」だが、実は左派ニューポリティクスの潜在的な支持基盤の中核に位置することが明らかとなった。ただし、「無趣味人」と同様、現在のところは政治的主体として目立った動きをみせているわけではない。

以上のように、若者世代内の主観的条件の多様性を考慮することにより、既存の研究では十分に明らかにしえなかったポピュリズム支持—不支持の論理を解明することができたといえる。

(5) 国内外における位置づけとインパクト

- ① 政治研究の既存モデルに対するオルタナティブを提示し、新たな解釈を可能にする知見を示し得た点に大きな意義がある。同様の研究は政治学者によっても試みられており、今後その発展が期待される。
- ② 若者をミリュウによってとらえるという視点は、従来の若者研究にはみられなかったものであり、学会での報告に際しては若者研究者からも反響があった。今後多方面への応用が期待される。
- ③ ミリュウ研究の本場であるドイツの政治研究者を招き、ワークショップを開催した。後述する問題点が多く指摘された一方、ミリュウ・モデルにもとづくポピュリズム・ニューポリティクスの国際比較研究にむけた有意義な意見交換がなされた。

(6) 今後の展望

① 問題点

ミリユー・アプローチは歴史の浅い研究方法であり、今後さまざまな問題の解決が求められる。具体的には、(1) ミリユーの恣意性・不安定性、(2) 変動可能性をどうとらえるか、(3) 社会的属性との関連をどうとらえるか、といった問題が未解決であり、さらに研究を進めることでその解消を図りたい。

② 本研究のさらなる展開

現時点では、探索的な分析の段階にとどまっており、本研究の目的が十分に達せられたとは言いがたい。変数を入れ替えるなどしてより適切なミリユー・モデルの構築を目指したい。そのうえで、本研究の知見をまとめる形で著書を刊行し、その成果を広く公表したい。

③ 新たな展開

先に示したように、若者研究への応用、国際比較への発展などが期待されており、今後共同研究などをおしてミリユー研究をさらに展開させていきたい。

(7) 副次的な研究成果

① 石原都知事の支持基盤

全サンプル・データを用いて、2007年都知事選の投票行動分析を共同で行った。分析の結果、石原都知事の支持要因としてナショナリズム、経済的自由主義、リーダーシップへの評価などがあること、こうした要因が民主党支持層および無党派層に分断をもたらしたため、対立候補が支持を得られなかったことなどが明らかとなった。

また、本研究のデータと過去の共同研究データを用いて、石原都知事の支持基盤の変化についても分析を行った。分析の結果、以前の石原都知事は政治不信の強い層からも支持されていたため、圧倒的な勝利を得ることができていたことがわかった。分析結果は市民団体主催のシンポジウムでも報告した。

上記は副次的な研究成果ではあるが、その問題関心を発展させ、新規の科研費プロジェクトに取り組んでいる。

② ポスト55年体制期における公明党支持層

本研究の調査データおよび過去の共同研究データを用いて、ポスト55年体制期における公明党支持層の分析を試みた。そこでは、公明党支持層の属性的特徴は変化しているのか、政治意識に世代差が生じているのか、といった点を分析課題として設定した。

分析の結果、公明党支持層の階層的地位は依然として中下層に固定された状況であること、都市部への流入層が減り、地付き層が増加していることが明らかとなった。また、若年の公明党支持層は旧世代とは異なり、小泉元首相などの新自由主義的な政治家に対する支持が強いことがわかった。このテーマについても研究を継続する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 松谷満、若者のミリユーと政治的好感度——ポピュリズム、市民運動、東アジア、桐蔭論叢、20、135-144、2009、査読無
- ② 松谷満、若者におけるポピュリズムの支持基盤——ミリユー・アプローチによる実証的検討、茨城大学地域総合研究所年報、42、41-59、2009、査読無
- ③ 樋口直人、伊藤美登里、田辺俊介、松谷満、アクティビズムの遺産はなぜ相続されないのか——日本における新しい社会運動の担い手をめぐって、アジア太平洋レビュー、5、53-67、2008、査読有
- ④ 丸山真央、松谷満、久保田滋、伊藤美登里、矢部拓也、田辺俊介、高木竜輔、日本型ポピュリズムの論理と心情——2007年東京都知事選における有権者の投票行動の分析、茨城大学地域総合研究所年報、41、81-115、2008、査読無

[学会発表] (計3件)

- ① 松谷満、ポスト55年体制期における公明党の支持層、「宗教と社会」学会関西地区大会、2009年3月28日、関西学院大学梅田キャンパス
- ② 松谷満、若者におけるポピュリズムの支持基盤——ミリユー・アプローチによる実証的検討、日本社会学会、2008年11月24日、東北大学
- ③ 松谷満、ミリユーの政治社会学——ミリユー政党としての公明党、日本社会学会、2007年11月17日、関東学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松谷 満 (MATSUTANI MITSURU)
桐蔭横浜大学・スポーツ健康政策学部・講師
研究者番号：30398028

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし